

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論文題目

英語学習における活用的学習観の機能と形成過程

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 中谷素之

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 清河幸子

論文審査の結果の要旨

今日、わが国において英語教育の重要性は高まるばかりである。その際、英語学習をどのようなものとしてとらえるのかという「学習観」が、学習行動やその後の習得に大きくかかわっていることが近年知られてきた。本論文では、英語学習者にとって効果的な学習のための、英語によるコミュニケーションの能力やスキルを重視する活用志向の学習観の重要性に注目し、学習方略や英語授業における授業活動との関連など一連の研究を通じて学習観の機能と形成過程を明らかにした。

第1章では、学習に対する信念の理論的背景について整理し本論文の目的を提起した。学習観は「学習成立および効果的な学習に対して学習者がもつ信念」と定義されるが、本章では認識論的信念など先行研究における近似した概念と比較し、その特徴について論じた。その上で、先行研究の問題点として、英語学習の特徴を反映した信念を取り上げることの重要性、および信念の規定因を検討する実証的検討の不足を指摘し、文法などを中心とした英語学習観である伝統的学習観に対し、活用志向の学習観がどのように効果的であるかについて先行研究を基に議論した。

第2章では、活用志向の機能に関して、学習方略との関連に着目して検討を行った。まず、英語学習観を測定する尺度を作成し(研究1)、尺度構成を行った結果、文法や記憶中心の「伝統志向」と、実践的な英語使用を重視する「活用志向」とが見出された。また活用志向の学習観をもつものが、学業成績につながる学習方略をもっている傾向が示された(研究2)。活用志向と動機づけ面の学習方略、学習行動の関連を検討した結果、活用志向は自律的調整方略を介して学習行動を促進し、伝統志向は成績重視方略を介して学習行動を抑制する可能性が示された(研究3)。

第3章では、学習方略使用との相互的な関係性に着目し、英語学習観の規定因を検討した。まず学習全般に対する学習観として方略志向を取り上げ、学習方略使用との相互的な因果関係について検討した(研究4)。交差遅延効果モデルによる分析の結果、方略志向が学習方略使用に影響を与えるという想定されてきた影響に加えて、学習方略使用が方略志向に影響を与えるという関係性が示された。また英語学習観と学習方略使用との相互的な関係について検討した(研究5)。その結果、学習方略の使用は有効性の認知に媒介されることで英語学習観に結びつくこと、特に活用志向は、深い処理方略と音声記憶方略の使用および有効性の認知から促されることが示唆された。結果として、学習方略の使用経験によって形成された学習観は、後の学習方略使用を予測するという相互的な規定関係が示された。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

第4章では、活用志向を形成する社会的要因について検討した。英語授業における相互作用的な授業活動の認知が活用志向に与える影響を検討した(研究6)。重回帰分析の結果、大学の英語授業における相互作用的な授業活動の認知は大学入学後の活用志向と正の関連を示し、相互的な授業活動の認知が活用志向の形成に寄与する可能性が示された。ここから、英語において相互作用的な授業活動の場を設定するとともに、学習者が方略重視になるような支援を行うことで、活用志向を効果的に高められる可能性が示唆された。また、相互作用的な授業活動は、大学入学時に英語学習に対して自信のない学習者にとって有効であることが示唆された。

第5章では、本論全体における総合的な考察を行った。英語の活用を重視する学習観を活用志向として想定し、その機能と規定因を実証したという独自性、活用志向の機能として、認知的側面・動機づけ側面に関わる学習方略を取り上げ、活用志向の高い学習者が、効果的な学習方略を用いることにより学校教育における学習成果を挙げていることを実証した実践性などが論じられた。

以上のような内容の本論文について、口述試験では、3名の審査者から以下のような指摘・疑問が出された。

1. 英語学習者の目的はさまざまあり、学校での授業のため、あるいは留学のためなど大きく異なる。それによって英語学習観のもつ意味や、学習行動への影響も異なるのではないか。
2. 英語学習における『社会的要因』とは何か。英語は当然学ぶべき、などの主観的規範や社会的なニーズの高さの認知など、社会環境や規範的な側面にも焦点を当てるべきではないか。
3. 学習観が学習行動、成果に影響するパスモデルを検討しているが、それらが逆のプロセスを経ること、すなわち学業達成が学習観に影響を及ぼすというプロセスもありうるのでは。
4. 英語学習観の概念は、『活用志向』と『伝統志向』では、測定の側面が異なるのではないか。前者が効果性の認知、後者は定義的、宣言的な知識を測定している可能性があるのではないか。

論文審査の結果の要旨

5. 学習観という概念について、認識論的信念や学習の概念、教科の信念など、幅広く全般的な思考も示しており、非常に広範である。測定項目の内容も含めて、どのような概念ととらえているのかを再度検討する必要があるのではないか。
6. 本論文の各研究では多数のデータの量的分析が主であり、全体のモデルを示す方向で研究が進められているが、そこでは学習者個人の学びのあり方や、個人差のあらわれを示しているといえるのか。英語学習研究への貢献という意味では、量的で全体的な傾向だけでなく、個々人の学習過程を記述できるようなアプローチも可能ではないか。

これらの指摘に対して、論文申請者はその意味を十分理解し、その上で、研究の内容に基づいて、論理的で適切な回答を行った。

上記のような課題も考えられるものの、本論文の内容は、英語学習における信念に注目し、活用志向の英語学習観が、さまざまな学習の側面（学習方略、動機づけおよび学業成果など）に及ぼす影響を実証した独自の視点をもつ価値のあるものである。6つの実証研究において丁寧にモデルを積み上げ、一定のデータに基づいて英語学習観が英語学習においても効果やそのプロセスを示し、わが国の学習観研究にひとつの成果を提供したものだといえる。英語学習の指導実践においても、学習者のどのような考え方に働きかけるべきか、いかに学習を支援するべきかにも有益な示唆があると考えられる。

以上の点から、審査者は全員一致して「可」と判断した。